

「はたらく人の夢と共感を創造する」

…働く人の働く人による働く人のための銀行…

北海道労働金庫 理事長(北海道生産性本部 理事)
工藤 和男(くどう・かずお)氏

略歴: 昭和30年生まれ。48年日本電信電話公社入社。平成元年全国電気通信労働組合北海道地方本部執行委員、12年NTT労働組合東日本本部執行委員、16年NTT労働組合北海道総支部執行委員長、情報産業労働組合連合会北海道協議会議長、23年日本労働組合総連合会北海道連合会会長を歴任。同年北海道労働者福祉協議会理事長に就任。28年6月より現職。



■北海道労金は1951年(昭和26年)5月に、札幌の市民会館で開かれた総会で労働金庫「北海道勤労信用組合」という名称で誕生しました。

当時を語る多くの資料からは、道内労働者の生活がインフレ物価高や賃金・手当の遅欠配などにより、多額の借金を抱えて生活する労働者が多かったことが窺われ、労働者個人の銀行からの生活資金の借入れに至っては、銀行に預金を持ちながら借入する途が絶られていたため、高利の質屋か無尽といわれる闇金融に頼るしかすべがなく、生活の困窮は増すばかりの実態であったとされています。

労働者の間に、こうした状況を一刻も早く解決するために「労働銀行」の設立が必要という機運が盛り上がり、先述した労働金庫「北海道勤労信用組合」の設立・創業につながりました。

その後、1953年(昭和28年)10月に「労働金庫法」が施行となり、翌1954年5月1日をもって、名実ともに労働金庫法に基づく「北海道労働金庫」が誕生し、今日66年を迎えています。

■“ろうきん”は、働く人の夢と共感を創造することを理念に据え、労働組合や生活協同組合などの働く仲間が、資金を出し合って生まれた共同組織の福祉金融機関であり、働く人たちがお互いを助け合う資金の循環こそ、“ろうきん”の大きな機能・特徴でもあります。

業務の内容は、預金やローン・各種サービスなど一般の金融機関とほとんど変わりません。

しかし、資金の運用が全く違います。働く人たちからお預かりした資金は、働く人たちの共有財産として、住宅や車の購入・教育・結婚・生活資金など、働く仲間とその家族の生活を守り、より豊かにするために役立てられています。

労働者間の立場の違いを超え、お金を循環する機能を有しているのは“ろうきん”のみであり、労働者間のあたたかな環(わ=資金循環)を繋ぐオンリーワンの金融機関として、事業の推進に引き続き取り組んで参ります。

■昨年11月30日には、労働金庫を含む協同組合が、国連教育科学文化機構(ユネスコ)の無形文化遺産に登録されました。

ユネスコは決定にあたっての理由を、「協同組合は共通の利益と価値を通じて、コミュニティ創りを行うことが出来る組織であり、雇用の創出や高齢者支援など、さまざまな社会的な問題への創意工夫あふれる解決策を編み出している」として国際社会が評価したものと考えられます。

また、2015年9月国連での「持続可能な開発のための2030アジェンダ」採択を踏まえた「世界を変えるための17の目標」と169のターゲット実現に向けて、協同組合や市民社会組織なども含め民間ステークホルダーとの連携推進指針が後押ししているものと考えています。

協同組合は、人々の自治的な組織であり、自発的に手を結んだ人々が協同で所有し、民主的に管理する事業体を通じて共通の経済的、社会的、文化的なニーズと願いをかなえることを目的としています。

“ろうきん”は、協同組合の一員として今回のユネスコ無形文化遺産への登録を契機に、改めて協同組合の仲間と連帯しながら、働く人たちの暮らしを支え、快適で過ごしやすい社会づくりを目指していかなければなりません。

協同組織としての自分たちに誇りを持ち、働く人たちの暮らしを支えるために資金循環機能をしっかりと発揮していきたいと考えています。